

2011 SEMINAR of The Japanese International  
Association of Costume in Finland Cosponsored  
by University of Lapland and Aalto University  
KIKUKA Traditional Japanese Chrysanthemum  
Patterns

著者	IZUMIYAMA Sachiyo
雑誌名	北翔大学短期大学部研究紀要
巻	50
ページ	85-88
発行年	2012
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1136/00000698/">http://id.nii.ac.jp/1136/00000698/</a>

2011 SEMINAR of The Japanese International Association  
of Costume in Finland  
Cosponsored by University of Lapland  
and Aalto University

KIKUKA  
Traditional Japanese Chrysanthemum Patterns

Sachiyo IZUMIYAMA



Seminar 2: School of Art and Design, Aalto University, August 24, 2011

### KIKUKA – Traditional Japanese Chrysanthemum Patterns

The traditional patterns of fashion culture nurtured in Japan reflect its aesthetic value. Patterns played an important role in most ancient Japanese costume decoration. They have been inherited as kimono patterns since the 19th century. These designs encompass images of seasonal plants and symbols of luck representing hopes for happiness and celebration: indications of people's fundamental feelings used as motifs for clothes worn in everyday life.

Over the last several years, I have produced costumes with a focus on incorporating traditional Japanese patterns into modern clothing design. All these pieces have involved the reuse of antique kimonos from around a century ago, and are characterized by patterns that were in fashion in those days. I have produced works featuring cherry blossoms, which are a classic symbol of Japan, and cranes which are typical lucky figures representing longevity.

Now, I have produced a garment wholly adorned with a pattern featuring chrysanthemums a typical autumnal plant of Japan. To create this, a chrysanthemum-patterned Japanese style silk coat from half a century ago was remade into a dark purple half-length coat with a dramatic drape at the back. The collar often seen in those days was adopted in its original form without any change to its shape. I also made a pink-orange blouse and a skirt from the coat lining, which was a beautiful fabric with a chrysanthemum pattern as its base design.

The production of these works convinced me that the bold but delicate and sophisticated grace of kimono patterns has a timeless charm that captures people's hearts even today. I believe these designs represent the inheritance of the Japanese character and sense of aesthetics. I hope such traditional patterns will be handed down to the younger generation and be widely adopted in its fashions.



Seminar 1: University of Lapland, August 20-22, 2011

## 1. 作品解説

日本の伝統文様からイメージしたドレス ―菊花―

日本で育まれた服飾文化の美意識はその伝統文様にみることができる。古くから日本の伝統衣装の装飾には、文様がその大半を担っており、19世紀以降からは「きもの文様」として継承されている。四季おりおりの季節感をあらわす植物文様、幸せを祈り祝う心をあらわす吉祥文様など、文様は人間が本質的にもっている基本的感情を表現しており、常に身につける衣装のモチーフとして飾られている。

ここ数年、制作者は日本の伝統文様を現代のドレスデザインに取り入れた衣装を制作している。いずれも約一世紀前のアンティーク着物を再利用し、当時流行した文様を活かすようにしている。今までに日本の代表的な花である“桜”や、長寿を象徴し吉祥文様の代表である“鶴（鳥文様）”をデザインとして組み入れた作品を制作した。

今回は日本の秋草を代表する“菊文様”が全体に配置されたドレス制作を試みた。約半世紀前に使用されていた菊文様が入った濃紫色の和装コートは、後に大きなドレープが入った5分丈コートにリメイクし、当時の特徴ある襟は形を変えないでそのまま使用した。また裏布として使用されていた菊模様が美しい薄橙色布（色無地菊模様）を利用して、ブラウス・スカートを作成した。

衣装作品の制作からきもの文様が持つ大胆でかつ繊細、洗練された優美性が、時代を越えて現代人の心を捉えていることを確信した。それは日本人の精神性や美意識の継承であると思う。若い世代のファッションに日本の伝統文様が浸透し受け継いでほしいと望んでいる。



菊文様（表布）



菊文様（裏布）



菊文様の和装コート（1950年代）  
（表布）



（裏布）



ラップランド大学展示参加者口頭発表



アールト大学作品発表会場

## 2. 2011年度フィンランド国際服飾学術研究会に参加して

2011年度国際服飾学会フィンランド国際学術研究会は、北極圏の入口に位置するロバニエミ市の国立総合大学ラップランド大学デザイン学部ファッション&テキスタイル学科と、ヘルシンキ市にあるアールト大学（旧ヘルシンキ芸術デザイン大学）デザイン学府の両大学で開催され、筆者は作品展示及び展示参加者口頭発表の機会を得た。今回の学術研究会はフィンランドの現代デザインと日本の伝統服飾を双方に紹介、学術交流を目的にしている。「現代服飾文化にみられる伝統と未来ー日本とフィンランドの比較と交流」と題し、両大学の全面的共催を得て、フィンランドの研究者やデザイナーおよび両大学の教員、学生が多数参加し研究発表と活発な意見交換が行われた。

2011年8月22日、ラップランド大学教授マルヤッタ・ヘイッキ＝ラスタス氏による講演「ラップランド大学における衣服及び素材の教育について」にはじまり、日本から研究発表5件、展示参加者発表が10件行われた。参加したラップランド大学学生から、日本の伝統衣装文化や美意識について多くの質問が寄せられた。また2日間かけて実施されたフェルトワークショップや発表終了後のパーティで、ラップランド大学教員と親しく交流をもつことが出来た。

8月24日アールト大学において、ヘルシンキ大学ミンナ・エヴァソーゾ博士の「日本の美における洗練された枯淡と美意識」、学習院女子大学教授増田美子氏の「日本の花嫁の被り物の歴史的背景」の講演がなされ、その後研究発表フィンランド2件、日本3件が行われ、また発表会場教室前のフロアでは作品展示を実施した。昼食時や交流パーティでは参加したアールト大学学生達と、彼らが興味尽きない日本美についての意見交換を行った。

今回の学術研究会はフィンランドの大学と国際共同研究を推進し、ラップランド大学と学術提携を結んでいる県立山口大学教授水谷由美子氏により実現されたものである。多彩なプログラムで研修成果をいただいたことは勿論だが、多角的な視点からフィンランド服飾文化を学ぶことができたことも大きな収穫であった。

ロバニエミから北極圏イナリまでの車窓には、森と湖が果てしなく続いていた。いつしか道東の景色とオーバーラップさせながら、北欧の少数民族サーミ人の生活様式をSAMI民族博物館で見学しながらアイヌ民族を想い、北の自然とともに生きる地域文化の根源は何かと思い巡らした。それ故に、地域生活文化の創造は国際交流を通じた展開にありと、筆者に発想の転換を促した研修となった。